碌山忌記念講演

荻原守衛の彫刻を解剖する

布施英利先生
（美術批評家、東京藝術大学教授）

令和五年四月二十二日（土）十三時三十分～
於：碌山公園研成ホール

なお、文中の図版や解説の様子は映像（https://www.youtube.com/watch?v=mKxlB75TC-M&t=2714sをご覧ください。数ヶ所の小出しの下にある時間はYouTubeのもの。）

はじめに

今ご紹介いただきました布施英利と申します。今日は碌山美術館に講演をするという機会をいただきまして、美術館の関係者のみなさま、お招きいただきましてどうもありがとうございます。講演ということ自体は結構長く仕事をしているので、あちこちでたくさんやってきたんですけれども、今回は特別で本当にありがとうございますという気持ちがありまして。

大学を出る時に卒業論文というのを書くんですけれども、荻原守衛をテーマにして書きました。これが卒業論文のコピーで、こんなのを書きまして。それだけでも荻原守衛と、あるいは碌山美術館と自分の人生が縁があるんです。その後大学院に進みまして、修士課程に年間の最後に出した修士論文でも、なんとまた荻原守衛の《女》について研究しまして、その後博士課程ではちがうテーマになって手を広げていったんです、言ってみれば自分にとって学者としての人生の始まりというが荻原守衛でして、かつ論文を書いた頃はほぼペーペーでしたので誰にも注目してもらえなかったんです。でも長く生きているといいことがあって、こんな形で自分の学者としての出発点の聖地である碌山美術館で講演をする機会をいただいて、大変懐かしいというか、なんかこう生きてきてよかったなという気持ちになって、特に今日の講演のためにここ数日準備をしてきたんですけれども、そんな思いに包まれておりました。

僕は群馬県の出身で大学大学院の時は大学が上野なので電車で一本で行けたので自宅に住んでまして、碌山美術館には何度も来まして、東京に行くのと同じくらいの距離、時間でここに来れるので。ある時は、家の近くの歯医者に行って、天気が良かったんで、ふと思い立ってここまで来たことがあって、昔は携帯電話がなかったので、公衆電話で親に今穂高町にいるんだと言ってびっくりされたこともありました。その頃は、何度も何度もこの地に足を運ぶ、そういう思い出の場所でありました。まあそんな関係もあって大学卒業する時に研究テーマをどうするかということになって、荻原守衛を選びました。

研究者としての細かい話を言いますと、美術を研究する場合は大きく二つ、西洋美術と日本東洋美術に分けることができます。それで大学院の先輩から、君はどっちをやるんだいと立ち話で聞かれた時に、どっちもやりたいですって言ったら、それは無理だって言われて、今の美術の学問の世界の基準からして西洋美術をやるか日本美術をやるか、どっちかに属さないといけないというふうに言われたんですけども。どっちも

と答えた自分の意図というのは、荻原守衛をやったら、荻原のルーツというのは、ロダンをはじめとする西洋美術ですし、荻原はもちろん日本の彫刻家で、日本の美術の歴史にその名の刻まれた人なので、荻原を入口にして日本も西洋も両方アプローチできるんじゃないかと考えて、そんなところもあって、大学を卒業した時はそんなにいろいろ研究したわけではないんですが、それから四十年くらいの間にいろんな研究とかあるいはいろんな美術紀行を、パリの美術館に何回も行ったり、イタリアに行ったり、エジプトに行ったり、また奈良に行ったりとかしてきて、いろんな写真を撮ってきて。

今日もその内何枚か荻原守衛の話と重ねてお話ししますけど、今あらためて、自分自身は生涯荻原守衛の研究家であったわけではないですけども、もっと広く、すべてについて、ずっと研究してきたんですけど、それが今、特に今回この講演の準備をしていて、あと先ほどご紹介いただいたなかにもありましたけど、僕は藝大を出た後に東大の医学部で養老孟司先生のところで研究生活を実質十年くらい送ったりしてまして、解剖学についてもそれなりに詳しくなったんですけども、荻原守衛も解剖の絵をたくさん残していて、それも含めて荻原守衛が何を描いたかということもよくわかるようになったので、人生この時点でもう一度荻原守衛に焦点を当ててみると、その後の四十年間というのが全部荻原守衛に集約できるなと思ったりしました。その一端のお話をさせていただきます。そしたら電気を消していただいて。あと七十分、八十分ですかね、一時間から一時間半のあいだの話をしますけども、ここからはスライドを使ってお話をしていきます。

荻原守衛の彫刻を解剖する

それでは「荻原守衛の彫刻を解剖する」ということで、先ほども言いましたけど、僕は大学の卒業論文、大学院の修士論文で荻原守衛のことを書きました。先ほど館長室で館長さんとお話をしていたら、僕が書いた論文がありますよって言われて、自分の名前を書いてこちらに謹呈したものですが、忘れていたんですが、僕の記憶よりも碌山美術館の資料保存能力の方がはるかに高くて。これは修士論文の方ですね。自分にとってもちょっと懐かしい再会をしてみました。それで修士論文については自分も保管が悪くて、残っていなくて、唯一残っていたのがこれらの修士論文のスライドです。昔はこういうプロジェクターではなくてスライドでした。今日のメインの話は、私のオリジナルの荻原守衛研究についてですが、これは最後の二十分か三十分でお話しします。そこに至るまでは、もう少し荻原守衛の一般の話をしようかと思います。

これは荻原守衛ですけども、本題に入るにあたって、そもそも僕にとってここでこういう研究発表というか講演ができるというのは、言ってみれば自分の研究を、お寺じゃないですけど碌山美術館に奉納するというか、なんかそんな気持ちもあって。もう御一方、奉納したい方がおりまして、それがこの方なんですね。この方は僕が大学の時に、東京藝術大学の彫刻科で助手をしていた丸山隆さんです。もし地元の方でしたらご存じかもしれません、この穂高の、旧穂高町の出身で、僕と六歳ちがうので、この写真はもう少し歳をとってからでしょうけど、僕がお世話になったのは丸山さんがだいたい二十代の後半くらいだと思うんですけども、で、藝大で荻原守衛の研究をしている学生がいるということで気にかけて下さって、特に修士論文、卒業論文で一回荻原守衛の研究をしたので、それでずっと気にかけていただいて、修士論文の時に当時穂高町の丸山さんの実家に丸山さんと来て泊まらせていただいて、のちに館長になってその当時は信州大学の先生だった仁科惇先生のお宅にうかがったりだとか、また仁科先生のお取り計らいで、こちらの美術館の公

開していない荻原守衛のスケッチブックとか、そういうのを見せていただいて、それで今日の一番最後のところで話す自分なりの、荻原守衛の、特に最後の《女》の見方について独自の見解に至ることができたんですけれども、丸山さんは、当時穂高町って荻原守衛もそうですし丸山さんもなんか彫刻家って多いんですねって話をして、そのあと丸山さんは東京藝大の助手を終えられた後に北海道の大学で美術の先生になって、これはそれに関係した記事なんですけど、藝大を去られた後はもうずっと交流がなくて、亡くなられたということを風の便りに聞きまして、二十年くらい前に亡くなられて、こういう抽象的な作品を作られた方です。

そもそも今日私がここで発表ができるその一番の研究のための助力をしてくださった丸山さんにもなんか、もう亡くなられて二十年くらいたたれているんですけども、この、なんて言うかな、この講演を捧げるというか、そういうふうにしたいと思います。普段の普通の講演ではこんな話はしないんですけど、こういう場なので丸山さんにありがとうございましたということを申し上げたいのです。

それで碌山荻原守衛のメインは代表作の《女》について話していきますが、みなさん荻原守衛について詳しいと思いますので、一般的な話はしなくてもいいかもしれないんですけど、ただこのあとYouTubeで公開したりもするので、美術に興味はあっても特に荻原守衛には興味がないという方がネットを視聴する方のなかにはいらっしゃるかもしれませんので、ちょっと簡単に荻原守衛の生涯とか作品について話してみたいと思います。

美術の道へ

（17：24／1：29：13）

荻原守衛はこの近くで生れて、農家の息子で、普通でしたらそれで一生を終えるんですけど、若い頃に自分の人生これでいいのかということで画家になろうと決心して東京に出ていくわけです。東京の不同舎で学んで、これは不同舎ではなくて、その頃描いた風景デッサンです（図1）。明治の時代にこのへんがどのくらいの田舎なのかよくわからないですけども、戦前というのは画家になろうとか東京美術学校に行きたいというはだいたい親から破門されるような時代だったと思うんですけども、その時代よりさらに前、明治の初めに近い頃東京に行くというだけで相当無謀な、あるいは野心に満ちたというか希望に溢れた人生に飛び込んでいったという感じなんですけど、しかし東京でしばらく画家になるための修業をしていて、これじゃ駄目だというので、

図1

ニューヨーク、そしてパリへ

ニューヨークへ行くんですね、そこで皿洗いとかハウスキーパーとかお金持ちの家のお手伝いさんみたいなものを住み込みでしたりなんかして、生活費を稼ぎながら美術学校に通って、さらに画家への研鑽を積むと。そして東京じゃ駄目だとニューヨークへ行くと。今度ニューヨークに行ってもさらにそれじゃ駄目だと考えてパリに行くんですね。

まず最初にこれは荻原守衛が書いたメモというか手紙です（図2）。世界地図があって、ここに日本があって、ぴゅーっとニューヨークへ行きますというようなことを兄に手紙を書いていて、自分のことを「すがもの大馬鹿者」と言ってですね、言ってみれば人生無謀な冒険に出掛け

ていくということなんですけど。ともかくニューヨークへ行ったということですね。

ニューヨークの美術学校アート・スチューデンツ・リーグ・オブ・ニューヨークで石膏デッサンをしている写真ですね（図3）。その頃描いた人物デッサンがこれです（第二次ニューヨーク時代）。それでニューヨークにしばらくいるんですけど、やっぱりこれでも駄目だというので。世界のアート、芸術を探求していく時に、地球上のどこに行ったらいいのかという、その本当にどまんなかを目指してどんどんどんどん進んでいって、それでパリに行くわけですね。

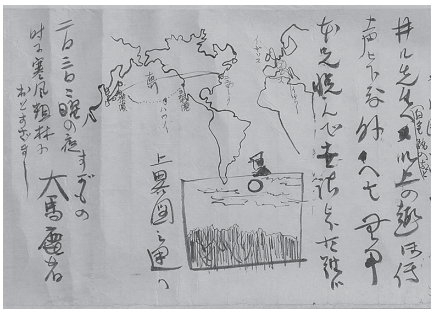

図2

図3
アート・スチューデンツ・リーグ・オブ・ニューヨークの守衛

ロダン《考える人》と出会い、彫刻家の道へ

それまでは画家になろうとしていたんですけども、パリでロダンの《考える人》を見て、おそらく日本人で初めて見たのが荻原守衛だと思います。《考える人》をパリのサロンで見た時の述懐が残っていて、この言葉は有名なので荻原を好きな方は何度も目にしている文章ですが、それを読んでみますと「廻り廻りてロダンの作に対するに及び、駭然として驚き、悚然として怖れ、稍々久しくして神往き魂飛び、又私自力の存在を感ずることが出来なかつた」。ロダンのある作品を見た時に自分の体から魂が飛び出して、それこそ壁にぶつかって、天井にぶつかって、あちこちぶつかって自分の中に帰ってきたぐらいな衝撃を受けた。「彼のロダンの作は、儼然として私の目前に聳立してをる。其天品は『想ふ人』といふので、ダンテの戯曲中の一人、地獄の入口に立つて、其の門を眺め、以て宇宙人生の真相を想像しつゝある人であつて」というので、ともかく絶賛するんですね。それまで画家になろうとずっと歩んで研鑽を積んできたんですけど、この彫刻を見た時に自分の天職は彫刻だというふうに気づきというか決意して、彫刻の修練を積んで、日本に帰ってきて二年後くらいに、この最後の《女》を制作して、それから三十歳で亡くなってしまうんですね。《考える人》に出会ってから六年後くらいのことです。

ここでロダンの《考える人》の話が出たので、ロダンの話をしてみます。これはパリのロダン美術館の庭にある《考える人》です。何回か行きましたが何年か前に行った時に撮った写真です。こういうのは、こういうのはっていうのは、これを撮っていた時に特に荻原守衛を意識していたわけじゃないんですけども、自分にとって世界中の美術作品を見て探求してまわって、そういうなかで撮った写真というのが、荻原守衛と結びつくっていうか、それがだから当初大学生の時に自分が、なんて言うか予感していた、やりたかったことで、まさにそうなんです。それで彫刻というのは、荻原守衛の彫刻もそうですが、版画などと同じで、特に粘土で作った彫刻は一点だけでなく、石とか木で作った彫刻は一点だけですが、粘土で作ったものというは石膏で型どりして、それをまたブロンズに移し替えるので、場合によったら十点ぐらい同じものがあって、

これはパリのロダン美術館なので、一番原型に近いというか最初の方に鋳造したものだと思いますけども。こちらはアメリカのフィラデルフィアのロダン美術館の《考える人》です。パリのオルセー美術館には《地獄の門》があって、ここに《考える人》がいて、これが独立してというかあるいは最初に独立したものを群像の中に組み込んでいったものです。こちらが静岡県立美術館の《考える人》です。ともかく彫刻というものが持っている重さとか塊とか力強さとか、そういったものが肉体というかな、そういうものの造形を通して彫刻であるとともに人間であるというような作品ですね。

ロダンで言うとほかに、これはパリのロダン美術館ですが、《接吻像》がありますね。男女が抱き合って接吻しているもの、これはちょっと伏線で今日の話の最後につながっていくので、まあロダンにこういう作品があると。あとですね、これはロダンの初期の《青銅時代》という作品ですが、片腕の肘を上に持ち上げて背伸びをしている男の像です。これは荻原守衛と直接関係ないんですがロダンの話をしますと、僕の専門が美術解剖学で、こういう人体像を見た時に、その筋肉とか骨がどうなっているかを見るのが専門で、特にこの彫刻を見た時に本当に筋肉があちこち描写されていて、それこそ学校の美術解剖学の試験でこれをおいて、このなかから二十個筋肉を示しなさいという課題に使えるくらい、ほとんど筋肉模型と言ってもいいようなものなんですね。

それで普通の力こぶとかはわかると思うので、すごくマニアックな筋肉の話をします。烏口腕筋（うこうわんきん）という腕の筋肉があります。ここが肩で、ここが肘ですね。烏口腕筋というのはここです。ちょうど脇の下あたりを通っている筋肉で、この図でいうと脇の下から腕に向かって、ちょっと太めの指ぐらいの太さで、そこに見える筋肉です。特に脇の下を上に向けるとちょうど見えるんです。まさにロダンの《青銅時代》はそういうポーズをしているので、あちこち凸凹があるんですけど、主要な筋肉はちゃんと描写しているんだろうけど、まさか烏口腕筋までやってないだろうなと思って見てみましたら、ちょっと拡大していくとわかるんですが、ここですね、もうくっきりと作っているんですね。ロダン美術館にはほかにこういうほかの彫刻のための試作だと思いますけども、腕の試作があって、そこに上腕骨がこんなふうに作られていて、ロダンは解剖学を研究していたことがわかります。

ともかく荻原守衛はこのロダンと出会うことによって自分の人生の進むべき道は彫刻家だと確信してというか決心して、実際死ぬまで彫刻だけを作り続ける人生へと歩み始めたわけですね。いったんニューヨークへ戻って、再びパリへ来る際にはオランダに立ち寄って、パリで彫刻を制作して、その頃作った彫刻の写真がいくつか残ってますが、そのなかで二つだけ日本に持ち帰ってきたのが《坑夫》と《女の胴》です。この《坑夫》は一時間ぐらい前に碌山美術館で撮影したもので、大慌てで組み込んでみました。パリから日本へ帰国する際にはイタリア、ギリシア、エジプトを通ってきました。

そこで荻原守衛が見た美術、今日は九十分くらいの講演なので、それらを一つ一つ詳しくお話しすることはできませんけども、逆に荻原守衛が見た美術というテーマで連続講座をすることもできるくらい、いろいろなものを見てきているんです。あらためて整理してみると、美術をやる上で大切な作品をほぼすべて見ているんですね。それにびっくりします。

守衛が見た、西洋美術

（32：46／1：29：13）

そのなかのいくつかを見てみます。まずはパリのルーブル美術館の《モナリザ》。これについて「レオナードヴンシのモナリザの肖像の如

き四百年後の今日尚生きたるモナリザが吾人と面して立つの思ひあらしむる其力と霊活なる手腕は到底望むべからず」という文章を手紙のなかで書いておりまして、確かに見たことがわかります。

帰国する時イタリアの北の方から帰るので、ミラノとかイタリアの真ん中のフィレンツェとかを通って、ずっとイタリアを南下して行くんですが、その道中《最後の晩餐》も見ていますが、特に守衛が心奪われたのがパドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂のジョットです。パドヴァは、北イタリアの大都市ミラノと東の方のヴェネツィアの間にある都市です。ミラノ、ヴェネツィア間は電車で二時間くらいです。ジョットの作品は何度も見ていますが、これは、息子が美術をやっているので、息子と二人で二〇一七年に旅行した時に撮った写真です。

ジョットは、時代的に言うとルネサンスが始まるちょっと前、中世からルネサンスにかけて西洋美術が移行期の人物です。中世の美術は非常に硬い。硬いというは、例えば人物を描いても微笑んでいる人は全くいない。つまり心の状態というか内面の描写を全くしない。まあそれはそれで中世の美術として素晴らしいものです。それに対してルネサンスになると、《モナリザ》とかがそうですが、やたら笑ったりというと変ですが、微笑んでいたり、身振りも大げさになってきます。

ジョットは中世からルネサンスへと移行期の画家なので、ある種の硬さがあります。硬さは、いい意味では厳かな感じ、崇高な感じ、まあ生き生きとした生命感はないかもしれないけど厳かさがあって、かつルネサンスへとつながっていくところがあります。スクロヴェーニ礼拝堂というのは、建物の壁に聖書の物語が描かれています。この作品《死せるキリストへの哀悼》は、死んだキリストが十字架から降ろされて、みんなが鳴き上げて嘆き悲しんでいる場面です。上に天使がいて、ちょっと写真が小さくて見にくいかもしれませんが、天使がいろんな形をして嘆いています。僕はイタリアに行って初めてこの作品を見た時に、イタリアでいろんな美術を見たんですが、帰りの飛行機の中で、なぜか知らないけど、この天使たちの嘆き悲しんでいる姿が思い浮かんできて、それくらい衝撃的でした。この作品《ユダの接吻》はユダがキリストに抱き着いていて、この顔の近さとか、目力の互いの強さとかが感じられます。

荻原守衛は、彫刻の美というか、美術の美について、静中の動、動中の静というようなことを言っていて、静というのは静か、動きのないもの。動きのないものの中に動きが感じられると、特に日本の仏像とかにそういうものが感じられるというようなことを言っています。それに対して、西洋の優れた美術というのは動中の静。動いている、激しい、ダイナミックな表現の中に、しかし静、厳然として動かないものがあるというのが、荻原守衛の美術に対する考え方なんです。ジョットはまさにそういう硬さと動きが共存していて、確かに荻原守衛が好きなんだろうなと思います。そしてこういう表現に影響を受けたんだろうなと感じたりしました。

こういうように、荻原守衛が見た西洋美術ということだけで、荻原守衛なしにしても西洋美術についていくらでも語れてしまうんですけれども、これがまさに僕が研究の出発点として、荻原守衛を選んだことだったんだなあと今あらためて思っているところです。

これは荻原守衛がミケランジェロの《昼》を描いたデッサンです（図4）。美術学校で石膏像をもとに描いたものなのか、フィレンツェのサン・ロレンツォ聖堂のメディチ礼拝堂で描いたも

図4

のなのか、わかりませんが。こちらは僕が行った時に撮った礼拝堂内の写真です。《朝》《昼》《夕》《夜》の四体の像があります。今度は文章ではないですが、《昼》や《夕》を描いたデッサンから荻原守衛がこういうものに関心を抱いていたことがわかります。ロダンによって目覚めた荻原が、ロダンの一つのルーツとしてのミケランジェロのメディチ礼拝堂の作品との出会いだったとも思われます。

ここで、僕の考えをちょっと言わせてもらいますと、《朝》《昼》《夕》《夜》の四体があって、これらはこういう半円形の上から滑り落ちそうな感じで乗っかっているんですね。これは何を表現しているかと言うと、一言でいうと天体、宇宙じゃないかと思います。だいたい《朝》《昼》《夕》《夜》というのは天体ですね。だいたいこのカーブ自体が、太陽が東の空から昇って半円を描いて西の空に沈んでいく。太陽だけでなく月も、あるいは星の移動もそうです。そういう宇宙というものを抽象、これは単なる人物像ではなくて宇宙というものをここに描いていて、僕はミケランジェロの作品の中でも最も傑作ではないかと考えています。人類の美術の中で最も素晴らしいものなんじゃないかと考えています。単なる人体の造形の仕方が力強いとか、そういうことだけでなくて、なんか宇宙そのものがそこに形として立ち現れているというのがあって。荻原守衛はこの作品も見ていたんですね。

ほかにフィレンツェで有名なのはボッティチェリの《ヴィーナスの誕生》ですね。今度はまた荻原の文章を読んでみますと、「絵画の方にはボチチエリーの画がある、ベル、アーチの「春」は評判程には感心したものでない」。ベルアーチというのは現在のアカデミア美術館のことです。ボッティチェリの有名な《春》に関しては冷たい感想で一言で終わっています。「傑作として推すのは「ヴイナスの誕生」である。ボチチエリーは実に空前の奇才である、此の画見ると恍惚として何とも云へぬ一種の感に撲たれる、奇麗とか優美とか云ふ感情を画に現したものとして此の画に越したものは殆んど無いと云つて善い。如何にもよく希臘神話の意味を現したもので、彼れの作中でも傑作の傑作であると私は信じた」と記しています。

これ見ると、今ギリシア彫刻のことを言っているんですが、荻原にどのくらいの美術史の知識があったかわからないですが、これ実はギリシアですね。まあルネサンス自体がギリシアの復活と言われているんですけど、とは言いながら中世というのはキリスト教美術の時代ですね、とは言いながらレオナルド・ダ・ヴィンチが描いた《最後の晩餐》もありまして、つまりはキリスト教絵画なんですね。それに対してボッティチェリはキリスト教とは全く関係のない、古代ギリシアの神ヴィーナスを描いています。実はなぜボッティチェリがこのポーズ、左手を下げて、右手を胸にあてているこのポーズにしたかというと、この作品のあるウフィツィ美術館に《メディチのヴィーナス》という古代ギリシアのヴィーナス像がありまして、それのオリジナルはなくなって、それのローマ時代のコピーがあるんですけど、それと全く同じポーズをしているんですね。ですからボッティチェリは単なるギリシア神話の女神を描いたのではなくて、古代ギリシアの彫刻をもとにして描いているんですね。ということまでも、荻原守衛は目が行っていたんだなということがわかります。単にアメリカとパリに行って絵と彫刻の描き方を学んで、ロダンの真似をして作っただけじゃなくて、本当に世界に美術のど真ん中というか、一番深いところまでいろんなふうに入っていったんだなと思います。

そのあとギリシアを旅して、スケッチブックにパルテノン神殿を描き留めています（図5）。今アテネにアクロポリス美術館というのがあって、ここがパルテノン神殿で、それが見える窓の位置に、パルテノン神

殿の彫刻がずっと展示してあります。ただ実際ほとんどのオリジナルはイギリスが略奪してロンドンの大英博物館に収蔵されています。ギリシアの美術の、文化省の役人は政治的に非常に頭がよくて、パルテノン神殿が見えるところにパルテノン神殿の壁を飾っていた彫刻が全部並んでいて、ほとんどの実物がロンドンにありますので、全部石膏が並んでいるんですが、ただすべて原寸大で並んでいるんで、イギリスが返還してくれれば、いつでも置き換える準備ができてますと世界に対してアピールしているわけです。それはともかくとして、荻原守衛はパルテノン神殿まで見ていたのか、という感じですよね。あとエジプトも旅をして《村長像》のスケッチを残しています（図6）。これは奈良時代の仏像、特に大仏とかに近い造形性があるというようなことを書いたりしています。これは僕が撮影した、パリのルーブル美術館にある《書記像》です。あとエジプトというのは結構猫の美術があって、荻原守衛はそれを描いているんですね。

ちょっと猫の話をしますと、人間が猫を飼い始めたのは古代エジプトなんですね。犬はもっと前で六千年前とか八千年前とかです。それはつまり狩猟採集の生活をしていた頃は、犬は狩りに必要なわけですね。最初は狩りのために狼とかを改良した犬を飼っていたんだけど、六千年前とか八千年前の絵が残っています。たぶん二万年前と言われているんですが、ペットとしての犬ではなくて狩りのための犬を飼っていました。よく見ると、犬、かわいいじゃん、みたいなことで、だんだんペットになってきたんです。

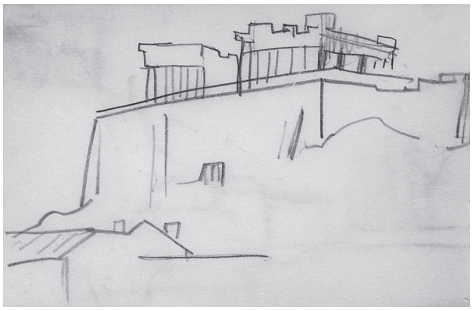

図5

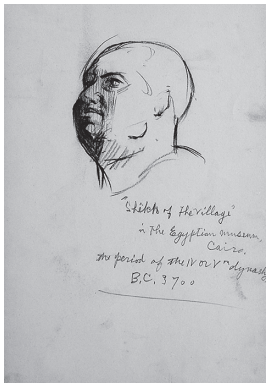

図6

猫と犬が二大ペットですが、犬の方が歴史が古いですが、古代エジプトになって猫がペットとして飼われるようになりました。猫も、もちろんそれ以前に山猫を、日本でも沖縄にイリオモテヤマネコがいますが、ああいう野生の猫がいて、そういう猫のなかから、何のために猫を飼い始めたかというと、これは、古代エジプトは農耕ですね。農耕が始まって、穀物を倉庫に蓄えておくようになった。そうするとネズミとかがやってくる。それを追い払うというか退治するために猫を飼うことを始めて、そこから猫も飼ってみるとかわいいじゃんということで、ペットになっていくんですね。それで、古代エジプトの猫の彫刻というのは、この荻原守衛が描いた二つのスケッチがそうなんですが、これは神様ですね（図7）。

古代エジプトは永遠の命というのを信じてミイラを作ったわけです。死んだ後もいつでも魂が帰ってこれるように、体を残すということでミイラを作った

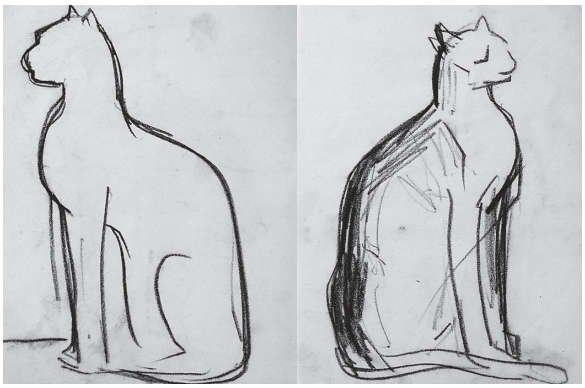

図7

んです。人間のミイラだけでなく、猫のミイラも作っているんですね。だいたいこの姿勢、古代エジプトの彫刻の特徴というは正面性と側面性です。さっきの静中の動、動中の静という言い方をすると、静ですね。体をひねっていたりだとか、そういう動きというものはなくて、ただまっすぐ前を向いている。あるいは真横から見ると真横からの一つの形があります。正面性と側面性ですね。人物がそうなんですが、猫の彫刻においても、やはりこの正面性と側面性があって、これは神だというのがわかります。これはパリのルーブル美術館で僕が撮った写真です。こういう神々としての猫というみたいのを、荻原守衛は描いていて、しかしそれだけじゃなくて、これを描いているんですね（図8）。これはずいぶんリラックスしている猫なんですけど、親と手を伸ばしている子猫ですね。こういう彫刻もあるんですね。僕は古代エジプトの猫の彫刻のなかで最も好きなものの一つで、パリのルーブル美術館にあるんですけども、子猫がお母さんと親しく、なんて言うかな、じゃれているというか、子供目線から見てもかわいいし、お母さん目線から見ても慈しむって場面から見てもかわいいですけども。これは神じゃないですね、たぶん。ペットとして日常垣間見た猫ですね。で、荻原守衛は、これは似たようなものがいっぱいあるんでどれを見て描いたかわかりませんけども、それを描いていると。それとともに神としての猫も描いていると。というようなことで、十代で画家になろうと決心して、東京へ行って、自分の天職はなんだろうと探し求めて、東京で絵の修業をして、

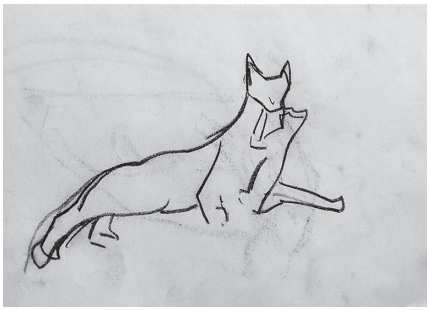

図8

ここじゃないと。それでニューヨークへ行って、やっぱり自分の天職はなんだろうと、それでここじゃないと。で、パリに行って、ロダンの彫刻に出会って、これだということで確信して、迷わず、でその後帰国の途中で、西洋美術の真髄というか、それを見て帰ってきて、帰国後たった二年間の制作活動で、この世を去っていくわけです。

日本での制作

残り三十分くらいになってきたので本題に行きたいんですが、ざっといきます。まず一九〇八年、亡くなる二年くらい前の《文覚》。これは碌山美術館の写真をお借りしました。これは、眼をひんむいていますが、恋に悩んで、苦しんで、懊悩している文覚像です。こちらは《デスペア》。デスペアというと絶望ということで、こっちもなんか絶望していると。ここらへんが荻原守衛の最後の《女》に関係してくるんですが、荻原守衛が置かれていた状況、女性関係がうまくいっていないことの反映で。あとは《北條虎吉像》のような肖像とか、友人の肖像《戸張孤雁像》とかを作ったりしてますね。庭に《労働者》というのがあったりだとか。ともかくこういうものを作って最後に、亡くなる一ヶ月前くらいに《女》を完成させて、突然血を吐いて、亡くなっていったということです。

荻原守衛の美術解剖学

（54：55／1：29：13）

ここでちょっと僕の専門である美術解剖学の話をしてみようと思います。すごい大急ぎでやりますけど。画家や彫刻家の卵がそのトレーニングとして、いろいろ石膏デッサンとか静物のデッサンをしたりしますが、それと並んで解剖学を学ぶというのが、ずっと近代の美術アカデミーの伝統で、荻原守衛もそのカリキュラムに即して、どうやら美術解剖学を

たくさん学んだようで、こういった絵をたくさん残しています。

ちょっとだけ言うと、ここが脇の下で、肩で、胸の大胸筋があって、腕の力こぶ、上腕二頭筋があって。こちらは今度後ろから見たところで、背中の肩甲骨があって、上腕三頭筋があって、こういうのは、僕は大学院の頃はすらすら出てきたんですけど、解剖学の研究を長年重ねてきて、いろいろ詳しく言えばいろいろ言えるんですけど、たとえばこれ、ここに頭があって、首があって、肩があって、ここに筋肉描いてありますけど、肩甲骨を持ち上げる筋肉があるところですとか、いろいろ勉強しているなということがわかります。

当時の勉強法としては左にお手本があって、それを右側に写すというようなことをどうやらやっていたようで、こういうのが残っていますね（図9）。ちょっと薄いですが写していますね。ただなんか見ていくと、途中で飽きたのか、女の人の顔を描いたりだとか、頭とかやる気がなくなったのか、ここまで下手なはずはないんですけど、あと何も描かなかったやつとかも残ったりしていて、まあそれでもいろいろ勉強したんでしょうけど、ざっとですね、人体の解剖学の話をしていくと。

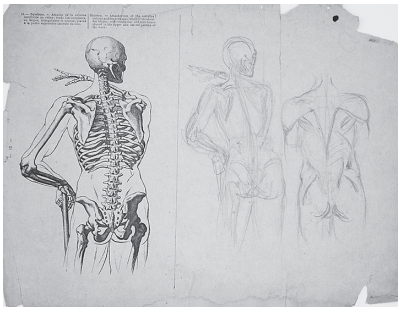

図9

頭部の筋

パーツ別にいくとまず頭。頭の筋肉、首の筋肉、例えば耳の後ろと前を繋ぐ胸鎖乳突筋が描かれていて、それを勉強したことがわかったり、咬筋といって、顎を閉じる筋肉とか、眼輪筋とか、いろんな筋肉を描いています（図10）。

体幹

胴体のことを体幹と言うんですが、体幹についても正面、側面を描いているし、これは背中から肩にかけてですね、これもお手本を写しているもの（図11）。例えばこれだったら外腹斜筋といって、ここが背中で、ここが胸で、その間のところにある筋肉を描いています。こっちも外腹斜筋ですね、これ外腹斜筋を勉強していたのかな。これは背中の後ろのところで、これは菱形筋、ひし形筋というんですけど、肩甲骨を持ち上げる、ひし形の形をしているので、これ、こっちにちょっと動くとどうなるかとか、そういう探求をしていたりだとかですね。これは脊柱起立筋という、背骨についている筋肉を描写してるとかですね、というようにいろいろあるんですね。荻原守衛の美術解剖学だけでいろいろ話せるんですが、五分ぐらいでちょっと。

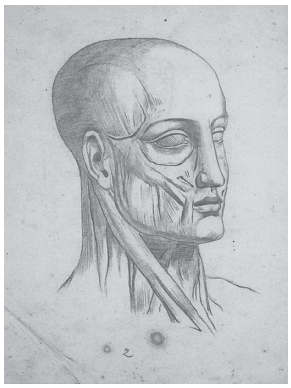

図10

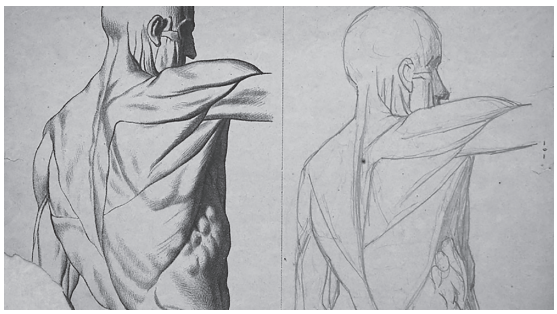

図11

上肢

次は腕ですね。腕についてもいろいろ、前から見たところ、横から見

たところ、後ろから見たところとかを描いていたりですとかですね。あと肘から下の前腕の骨と筋肉の対比して学んでいたりとかですね。

下肢

あと脚ですね。下肢についても描いています。ずっといっちゃいますけれど。で、ざっと行く前にこれをちょっと（図12）。これは脚を後ろからみたところで、大腿二頭筋と半膜様筋が分れて、ちょうど膝の後ろのところに筋肉のないところがあるんですけど、そういうのを描いていて、また別の絵では、ここんところのくぼみですね。これはくぼんでいるんですが、実際の人で見ると、ひざを伸ばすと膨らむんですね、それはなんでかと言うと脂肪があるからなんですけど、筋肉だけでは、膝のくぼみと書いて膝窩というんですけど、その研究をしていることもわかります。

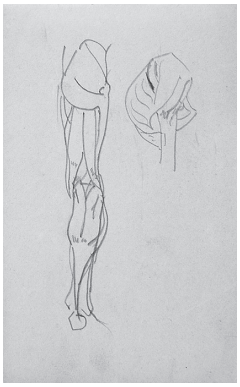
図12

これらの図から見てわかるのは、荻原守衛は美術解剖学、人体において筋肉に関してはほぼ一通り、全部ですね、マスターしているなということですね。それに対して美術解剖学というのは、大きく二つの軸があって、一つは筋肉、もう一つが骨なんですけど、荻原守衛が描いた骨を見ると、けっこう不完全というか、体の隅々まで亘っていなくて、これは上腕骨といって腕の骨で、これはかなり細かく、前から見たところ、後ろから見たところ、横から見たところを描いています。これは尺骨という骨なんですが、これは碌山美術館の図録で、ここで僕が指摘するのはあれなんですが、上下逆ですね（図13）。これはこっちが上です。これもこっちが上です。すみません、間違い探しみたいないじわるばばあみたいなことして。いじわるじいさんですね。あと指もやってますけど、ただ骨に関してはこの程度で、骨についてはそんなにやっていないということです。

ということでほぼ残り三十分弱になってきて、大学院生の時の私が何をやっていたのかという話を、先ほどお見せした当時のスライドそのものを使って、お話ししようと思います。これは大学の学術研究なので大学のモデルさんとか、そもそも荻原守衛の《女》はヌードなので、あとで少しヌードが出てきます。ただもう四十年前の白黒写真なので、画質が粗くてほとんどわからない感じなんですが。この写真のもとは、碌山美術館の方はわかるかもしれないんですが、どっかの本からとったものです。ともかくこの一つの彫刻だけに僕は若い頃の二十代前半の六年間をかけて取り組んでいました。彫刻というのは立体ですので、正面から見るだけじゃなくて、横に廻ったり、後ろに廻ったりして見るんです。実は絵画というのも、本当は正面から見るだけじゃなくて、セザンヌの絵とかは真正面から見た時と、こっちから見た時では全然見え方が違ったりします。だからセザンヌは彫刻家に影響を与えたと言われたりするんですが、それはともかくとして。論文が見当たらなくて、写真しか残っていないので、当時の私のことを推測すると、冒頭にこの写真があるというは、彫刻というは立体ですということをたぶん言ったんでしょうね。

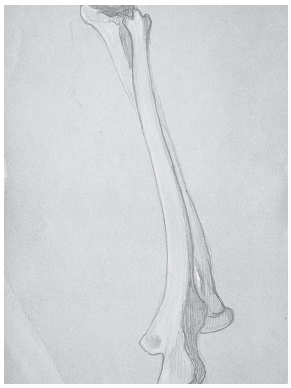
図13

美術解剖学の研究

（1：04：16／1：29：13）

第一章で荻原守衛の《女》について概説的なことをして、次に美術解

剖学の研究を述べました。これは当時の論文に付けた写真ですごく色が汚いですが、こちらは碌山美術館の本から先日複写したものです。ただ当時の写真はこんな感じですね。それで論文の全部、先ほどの解剖図ですね、それをコピーして黄色い紙に貼り付けて、論文の文章があってそれとともにたぶん図録というか図版を作って、G、H、Iというような記号をつけてやったんだろうと思います。

これが守衛の《女》ですが、モデルさんを大学の方で雇ってくれて、全く同じポーズをしてもらって比べました。それでいろんな筋肉がありますが、それらをちゃんと描写しているので、荻原守衛の美術解剖学の研究成果というものが彫刻に表れているということを論じました。

プロポーションの測定

あとプロポーションの測定ということをやりました。この荻原守衛の《女》のブロンズは東京藝術大学にもあるんですね。大学院生だったんですが、申請したら大学の研究室に一週間貸してくれて、一週間日夜、まあ夜は帰宅しましたが、この荻原守衛の《女》とずっと過ごしたわけです。もうこの作品とだけ向き合った一週間でした。当時は解剖学とか人類学とかいうようなことをやっていたので、まずはいろんなプロポーションを測ってみました。

この場合は床からの高さです。例えば、ここは大腿骨の付け根なんですが、測った点というのは、人類学でマルチンという学者が決めたもので、それに即して計測しました（図14）。これは彫刻であって人体ではないですが、人体であると仮定して、例えばここは床から何センチですとか、五十何カ所か測定しました。ほとんど写真が悪くてわかんないですが、ちょうど補助線を入れれば、ここから脚の付け根まで線が引いてあるんですけど、これが二百八十四ミリ。けっこう小さかった。あと首の付け根から乳房までが百三十ミリとか。あと顔も。鼻の付け根から測ったり、この線に沿って測ったり、頭の幅も測ったり、もうあらゆるものを測ってみました。

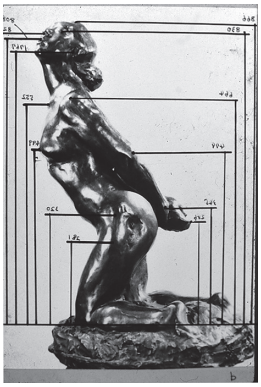
図14

プロポーションの測定（人体で）

今度は実際の人間にこの彫刻と同じポーズをしてもらって、全く同じところを測りました。それから彫刻と人間を比較して、それでモデルさんは、荻原守衛の彫刻のモデルになった人ではないですが、人間は例えば三頭身の人間がいないというのと同じでだいたい人間であればプロポーションは細かい違いはともかくとして、ほぼ違わないので、この二つを比較してみました。

その時出てきたのがこれです。これは赤い線と青い線とで描いてあるんですが、ちょっと補足してみますと、赤い線は、首の長さと腕の長さ、これは別々の話ですけど、これがモデルさんと比べるとでかいと百二十一と、まあ一・二倍ですね。つまり腕が長い。逆に首から胸まで、これが五十八％です。実際のモデルさんだったらこれぐらい下まで乳房があるはずなんですが、上にあることがわかりました。そういう結果が出てきて。これは真正面から見ても同じで。ここが以上に短いと。実際は、写真の角度にもよりますが、これくらいある。つまり、簡単に二つほど結論を言うと、頭が大きくて、首が大きくて、腕が長い、それに対して乳房が実際の人間ではありえないくらい、上の方についているということです。ただですね、彫刻として見た時は全然アンバランスではないで

すね。ですけれども実際はそうであったと。それを別の形で検証してみました。

碌山の《女》を立たせてみる

あの彫刻が立ったらどうなるだろうということを試してみました。顔、胴体、脚を真横から撮影して、それをカチカチカチッと縦につなぐとこうなりました（図15）。これを作った時に先生から、こういうことをやると荻原守衛泣くよと言われました。これはさっきの結果とまさに同じで、頭が非常にでかく、腕が長く、乳房がこんなところにあるんですね。立たせてみると確かにその通りでした。これは感覚的に検証してみるとそういうことで、それを実際数値で測ってみたら同じことが言えたんですね。これ見ると、誰が見ても、首とかおかしいですよね。デッサンが狂っていると思うんですが、これが彫刻になってみると、ただ上を向いているだけにも見えて、これはこのポーズだからこうなっているかというとそうじゃなくて、実際の人間で同じポーズをとって比較してみても、そういうことが言えたわけですね。で、そこに、なぜこのポーズをとると全く違和感がない、違和感がないどころか美しい形の流れが生れている。そういうことが、彫刻というものが持っている秘密、造形の一つの秘密なんです。けれどもそれだけでなくて、あと五分くらいでおしまいにしますけど、それだけでなくて、結論に行く前に、ほかにいろいろ話したので、もうちょっとだけ話させてもらいます。

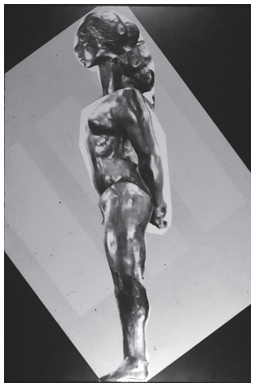

図15

真上から見たとき

真上から見たらどうなっているか、ということで、普通はこんな撮影はできないですが、借りたので、高い脚立の上に登ってその上から写真を撮ってみました（図16）。これは足首と足首をつなぐとこの線になる、肩と肩をつなぐとこの線になる、顔の正面をつなぐとこの線になるということで、この線がこの線、この線がこの線、この線がこの線ということになるのですが、これらは上下にあるので、螺旋のポーズを描いているということになります。その当時はなんでもやって、モデルさんも真上から撮ってみたりもしました。

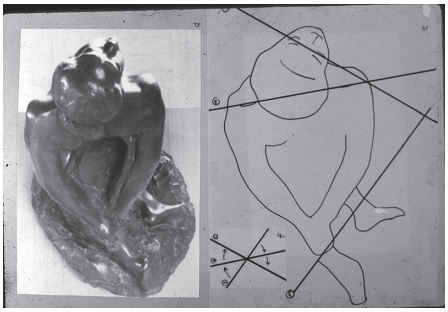

図16

造形のムーブマン

というようなことで、彫刻の造形のムーブマンということを言うと、全体としては三角形の構図なんですが、少し前に傾いている三角形の構図です。それだけでなく、さっきいった螺旋の渦を巻きながら上に行っています。前から見てもそうですね。また違った形の螺旋というのがあちこちにあって、いろんな螺旋が入り乱れるようにして上に向かっていって、上に向かっていったその焦点はどこにあるかというと、顔を見ると口なんですね。目を閉じて口を開いているので、だから湧き上がってきた力が抜けているんですね。だからこの彫刻の焦点は口にあるというのが、また結論に向けての一つの伏線になるんですけども（図17）。

人体の中の「らせん」

そもそも人体の中の螺旋というので、人体というのは見てみるといろんな螺旋の形があるんですね。これは髪の毛の渦巻きの螺旋、あと筋肉もこう斜めに伸びていて、これを抽象かしてみるとこういう螺旋になります。心臓の筋肉の層を見ると螺旋になっていますので、人体には螺旋が至る所にあると言うことができます。

図17

宇宙の中の「らせん」

螺旋というのはそれだけじゃなくて、宇宙の中にもあって、アンドロメダ大星雲とか、これは宇宙とは反対のＤＮＡですね、二重螺旋とか。世界というのは螺旋に満ちているわけです。植物でもそうで、朝顔とかが、こう螺旋の渦を巻いていって、その先になにがあるかというと、花があります。花というは生殖器官ですよね。つまり螺旋の行き先に何があるかと言うと性の世界、あるいは恋の世界と言っていいかもしれません。

そしてこれを先ほどの荻原守衛の彫刻と重ね合わせみると、花はちょうど顔で、その焦点が口にあって、性の世界で口というと接吻というのがイメージされてくるというわけです。この口から何が上に抜けて、すべての力がここに集中していくことがあります。というのが荻原守衛の《女》に関する分析だったんですけども、ここからがクライマックスです。

碌山の彫刻《女》のポーズ

先ほど冒頭で言いましたが、碌山美術館の資料庫を見せていただいて、その頃、最近の碌山の作品集には載っていたんですが、これらは当時から有名な《女》のためのスケッチというかデッサンですね。その頃は誰も指摘していなかったと思うんですが、スケッチブックの中に僕はこれを見つけたんですね（図18）。右側のポーズは明らかに《女》のポーズで、かつ足元に台座があるんで、つまり日常のある一断面をスケッチしたものではなくて、台座があるということはこれは彫刻ですね。彫刻のためのものであると。《女》はだいたい足の曲げ方とかが同じですけども、腕を上にあげてなんかラグビーボールみたいなものを掲げていると。

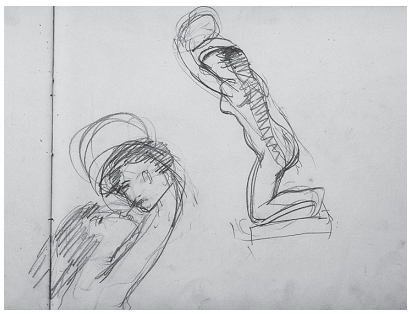
図18

その左側を見ると、そこに男の人の顔があると、つまりこれは接吻像ですね。この絵から、荻原守衛は《女》を、はじめ接吻像として造形したんじゃないかと考えました。しかし、どういう事情かわからないけれども、これを切り捨てて、単独の女性像としたのです。接吻像というと、ロダンの彫刻にまさにあるわけですね、こちらは当時の論文で使ったもの、こちらは最近撮影したものです。当然荻原守衛はこれらのロダンの彫刻を知っていたはずなので、初めはたぶんこういうのを作ろうとしたんですね。この頃荻原守衛は相馬良（黒光）という人妻との恋に苦しんでいて、叶わぬ恋ですね。なんか一緒にアメリカに逃げようと言ったりしたとか、しなかったとかいうことで。荻原守衛は突然血を吐いて死んでしまうわけですから、これは碌山美術館として公式にどうかわからな

いですが、あれは自殺なんじゃないかというふうに考える人もいるくらい、少なくとも恋に悩んでいたと。その荻原守衛が接吻像を作ろうとして、それが叶わなかった姿ですね、それを、要するに消された男は誰かというと、それは荻原守衛自身ですね。自分自身を消してしまったということですね。それがさっきも言いましたが、螺旋の形を描いていって口から抜けていく、接吻ってまさに口から抜けていくんですけども。そこでもう一つ謎なのは、腕を挙げているんですね。それで《女》の像というのは腕を下げているんですね。つまり、これ粘土なので最初、こういうふうに作ったんじゃないかと。それでこれ美術解剖学で言われるんですが、腕というのは胸の大胸筋と一体化しているので、腕を挙げると乳房も上がるんですね。だいたい十センチから十五センチくらい腕を挙げると、上がるんです。ということは最初このポーズで、さっきのデッサンが狂ったようなポーズじゃなくて、この腕を挙げたポーズで作って、でたぶん胸もその位置だった。途中から男の頭がなくなったので、腕を後ろに回して、それでかえって不自由になんかもがくというか、したんですが、そこで頭とか腕が異常にでかいというのが、なんていうか、ちょっと作り変えて、なったんじゃないかと。それで胸が高い位置にあるというのはまさにこのままなんですね。言ってみれば、もし荻原守衛、腕を挙げると胸が高い位置にあるというのはわかるとしたら、この彫刻のなかでそこにいないはずの異性に向かっている体の造形性を一番暗示しているのは胸が高い位置にあるということなんですね。それで実際に《女》の背中を見ると粘土がぐちゃぐちゃなんですね。こちらは論文の時の写真、こちらはついさっき撮った写真ですが、これを見ると明らかに造形的に前にいっていた腕を、このカーブ自体も心棒の針金を後ろに回したようなカーブみたいにも見えるし、このへんがぐちゃぐちゃになっていて、最初の構想と違ったふうにしたように考えられます。つまり、この《女》という彫刻はそもそもが接吻像であったと。それがわかった上で見ても、接吻像というのをやめて、単独像にしたというところにまさに荻原守衛の苦悩というのが造形されていて、それがそんな事情がわからない人が見ても、これを見た時に何かを感じるというか。ここ、口の上に何かがあるというのが《女》なんだというのが、僕の修士論文の結論でした。何かを感じるでしょうかという。そしたら以上で終わりです。

　というので、私が四十年前に研究したものをやっと碌山美術館に話として奉納することができたという感じです。どうもご清聴いただきありがとうございました。